

# 学会の使命と理想的 「交通とその安全」社会のデザイン力 不滅の「ロケットと発射台」の設計思想

石附 弘 Hiroshi ISHIZUKI



(公財)国際交通安全学会  
専務理事

今後10年は、地球環境の変化・科学技術の超加速度的進展・社会構造等の変化の潮流から見て、学会が掲げる「公益・理想・交通・安全・社会」の各概念の意味や価値にも変化が見込まれ、学会がその使命を全うするためには「変化を先取りした情報発信(ロケット発射)力と学会自体の態勢(発射台)力の整備」が必要である。

例えば「理想社会」の物差しも、国内総生産(GDP)成長指標からサステナビリティの重要定義「経済・社会・環境(トリプルボトムライン)」指標を経て、GNH(Gross National Happiness: 国民総幸福量)、HDI(Human Development Index)、HPI(Happy Planet Index)、GPI(Genuine Progress Indicator)、HSM(人間満足度尺度)等複眼的価値基準が模索される環境下では、「交通とその安全」も、交通事故の軽減はもとより、環境・安心・健康・福祉等総合的な「質の高いモビリティ社会」への視座や全地球的生命維持システムの保全、経済・社会・文化・環境等諸次元の統合型「持続可能な開発戦略」など世界共通課題へのかかわりが期待されている。

顧みれば、学会第1号研究の数寄屋橋交差点と暴走族研究(1975年)では、「人と車と環境」の複雑かつ有機的に結合した社会的難問解決に向け、異分野の有能な専門家が未開拓の「学際」的研究手法に取り組み、新しい社会技術開発の成果物(ロケット)が世に発射された。4半世紀後、世界科学会議(ユネスコと国際科学会議共催、99年ブダペスト)が「社会のための科学」を宣言したことにかんがみれば、先達の「未知への格闘」精神は、当学会の誇りであり、これからの未来を切り拓く源泉である。

ダーウィンが進化論で、「生き残るのは最も強いものでも最も賢いものでもなく、最も環境

に適応したものである」と警鐘を鳴らしたごとく、これからの時代は、環境変化という無限定の条件の下、自他非分離の「適応律」に基づく「環境調和型・自律的な社会安全システム」の構築が急務である。

だが、いつの時代も担い手の「人材育成」は半歩の歩みである。第1号研究では、学会がサロンと呼ばれる「特別の場」を提供、異分野の専門家が「坩堝」(melting pot)で「知の衝突と溶融」(化学変化)を起こし、後の大なる人間成長の礎を体得したという。

他方、IATSSフォーラム(鈴鹿)の人材育成事業は、文化も職業も違う優秀なアセアンの若者と日本の関係者の熱い議論や日本社会・文化の「触媒」によって、フォーラムを「坩堝」とし、『共に考え共に学ぶ』という『国際交流の真髄』の場を提供することによって理想的な人間社会のあり方を体得させ、世界に通用する高質のグローバルリーダーを輩出(ロケット)してきたが、これは、今世紀の最大課題である異なる文化への寛容性や多様文化との共生に適応し得る「適応律」型人材育成の社会実験ともいえよう。

創設者本田宗一郎氏の「人間の創造性や可能性、命や安全という普遍的な価値探求の高き志」と万物流転「変化への適応」を説いた藤澤武夫氏。当学会の設計思想には、中長期的視野で真に社会に役立つ有為な人材育成という創設者の大なる夢が組み込まれていたように思う。

1969年警察庁入庁後、内閣官房長官(後藤田、小淵両長官)秘書官、長崎県警察本部長等を経て現職。日本市民安全学会会長、厚木市及び豊島区のセーフコミュニティ専門委員等の活動を通じ「安全活力論」の普及に努める。(専務理事/2001年専務理事就任)